

## 第2章 能登島長崎の歴史と生活

### 1. 歴史

#### 1-1. 古代の能登島長崎

能登島には古代遺跡が多数確認されているが、とくに東部に目立ってみられ、島の西部よりも東部のほうが古くから人の営みがあったと考えられる。

能登島に分布する遺跡 72 ヲ所（橋本、戸潤，1982）のうち、34 ヲ所が能登島東部にあり、長崎地区では3 ヲ所の遺跡が確認されている。

表. 能登島東部に分布する遺跡一覧

名称	時代	場所	備考
祖母ヶ浦石塚遺跡	中世	祖母ヶ浦	
祖母ヶ浦宮山横穴	古墳時代	祖母ヶ浦	
御経塚山古墳群	古墳時代	祖母ヶ浦	
たいご遺跡	中世	祖母ヶ浦	
八ヶ崎宮の下遺跡	古墳時代	八ヶ崎	
八ヶ崎そうまん遺跡	古墳時代	八ヶ崎	
八ヶ崎ヘヅカ遺跡	古墳～中世	八ヶ崎	
鰻目コーケヤ横穴群	古墳時代	鰻目	
鰻目円山横穴群	古墳時代	鰻目	
鰻目ミソド遺跡	古墳時代	鰻目	
鰻目城跡	不明	鰻目	
長崎さかい松遺跡	古墳時代	長崎	
長崎古屋敷遺跡	古墳時代	長崎	
長崎古屋敷横穴群	古墳時代	長崎	長崎で最も深い谷の谷口部に ある。製塩土器が近くで出土。
小浦左幸屋敷跡	不明	小浦	
長崎小浦遺跡	古墳時代	小浦	
野崎城跡	不明	野崎	
野崎小学校遺跡	古墳時代	野崎	
野崎前田遺跡	縄文～中世	野崎	製塩土器や平安期の遺物、中世の 陶磁器など長期の遺物が出土。
野崎小谷内遺跡	古墳時代	野崎	
野崎近畑遺跡	古墳時代	野崎	
野崎横穴群	古墳時代	野崎	
野崎小谷内横穴	古墳時代	野崎	
野崎松鼻遺跡	縄文時代	野崎	
野崎かきざき遺跡	古墳時代	野崎	
日出ヶ島横穴	古墳時代	日出ヶ島	
日出ヶ島荒神遺跡	古墳時代	日出ヶ島	
二穴古墳	古墳時代	二穴	
二穴城跡	不明	二穴	
二穴小畑遺跡	古墳～平安	二穴	
向田城跡	不明	向田	
向田城山古墳	古墳時代	向田	
向田城山横穴	古墳時代	向田	
向田信光寺跡	中世	向田	
向田丸山遺跡	縄文	向田	

※石川県能登島町遺跡分布図 橋本澄夫・戸潤幹夫，1982 を参考に作成。

能登島町史（1982）には、長崎古屋敷遺跡について詳しい情報が記載されている。その一部を抜粋する。

- ・長崎古屋敷遺跡は、長崎集落の南にある通称“フルヤシキ”といわれる畑地に位置する。現在の海岸近くの海拔約2m 弱の低地にあつて、現海岸汀線まで100mを計らない。
- ・長崎古屋敷遺跡のすぐ西側は、シルト岩層からなる絶壁となつており、そこには長崎古屋敷横穴群が開口している。
- ・長崎古屋敷遺跡の北約300mにある通称“サカイマツ”と称される畑地には、製塩土器の散布地がある。
- ・山岳を超えた南約500mの旧東部中学校付近には、長崎小浦遺跡がある。
- ・本遺跡からの採集品には、製塩土器以外の土器がなく、明確な年代比定は困難であるが、製塩土器の編年から推測すると、本遺跡の年代は、古墳時代後期の6世紀～7世紀が想定される。なお、近接する古屋敷横穴は、7世紀代に比定されるものであり、本遺跡との関連が検討されねばならない。

## 1-2. 長崎村の成立

能登島町史（1985）の地区誌には、長崎村の村名の由来と位置についての記載がある。

### 村名の由来と位置

- ・長崎村は、能登島の東部海岸に位置する。
- ・寛政6年・1465年の八幡社再興棟札に、長崎左衛門太郎と当地の土豪の名がみえる。
- ・天正12年・の鰻目村算用状に「一、五百廿六俵式斗長崎分ちくてん」とある。前田利家入部の際に、住民は逐電し、鰻目より農民が入り、一村建となったと考えられる。
- ・島の各種起源について記した「嶋神役八太郎由書記」というもののなかには、長崎村、田尻村は、清和天皇の代（858～876年）に成立したとある。

## 1-3. 能登島の製塩の歴史

### 【古代】

土器で海水を煮沸し、塩をとる方法のことを土器製塩といい、それに用いられた土器のことを製塩土器とよぶ。能登半島には多数の製塩土器が遺跡から見つかっている。能登島の人たちが古い時代から塩を生産していたことがわかる。

古代遺跡が能登島東部に多かったことと同様、製塩遺跡と思われるものも能登島東部に多く分布する。また、その場所は海岸近くの海拔2～3mの低地に多い。

### 【近世】

藩政時代の能登島では、海に面していない別所村以外のすべての村において、揚浜式製塩がおこなわれていた。しかし、藩の政策である専売制のもとで塩の生産と販売が厳しく統制され、生産者であっても自家用に使うことはできず、すべて塩問屋を通じて塩を購入していたという。

表. 能登島町の製塩土器出土地一覧

No.	遺跡名	土器型式
1	八ヶ崎そうまん	盃・尖
2	鰻目ミソド	盃・尖
3	長崎さかい松	?
4	長崎古屋敷	盃・尖
5	長崎小浦	盃・尖
6	野崎小学校	盃・尖
7	野崎前田	盃・尖
8	野崎小谷内	尖
9	野崎近畑	尖
10	野崎かきざき	尖
11	日出ヶ島荒神	盃・尖
12	二穴小畑	盃・尖・平
13	向田	?
14	曲きのらA	?
15	曲B	盃・尖
16	曲	尖
17	須曾崎田出	?
18	南	盃・尖
19	無関かきのうちA	平
20	無関かきのうちB	?
21	無関かきのうちC	?
22	半浦A	尖・平
23	半浦B	尖・平
24	半浦C	尖・平
25	通海岸	尖・平

註) 盃：倒盃形、尖：角状尖底、平：平底、?：不明

※「能登島町史 資料編第一巻（1982）」498項、第2表による

能登島で生産された塩の多くは、富山県の各地に送られていた。また、富山藩を通じて飛騨へ売却されていた分もあったようである。

万延元年・1860年の記録によると、能登島には塩の生産に従事していた人(塩士)が345人いた。当時の長崎地区には9人の塩士がいたようである。能登島東部での塩士は多いが、長崎地区では少ないほうである。

### 【近代】

能登島では、揚浜式製塩の方法が近代までおこなわれていた。幕末から明治のはじめ頃まではとくに大きな変化はなかったが、日清戦争後の明治29年(1896)に生産高が減少する。それ以降減少が進み、明治37～38年の日露戦争の後には衰退する。政府は塩の専売制を明治38年(1905)からはじめ、同時に効率の悪い塩田の整理を進めた。明治44年(1911)に第一次塩田整理がおこなわれ、能登島のある鹿島郡のすべての塩田はこのときに廃止された。

### 【揚浜式製塩の方法】

- 1) 砂を敷きつめた塩田や塩浜を準備する。
- 2) 海から海水を汲んで運ぶ。
- 3) 敷きつめた砂の上に海水を丁寧撒布して砂を湿らせる。
- 4) 天日で水分を蒸発させて塩の結晶を砂に付着させる。
- 5) その砂を集めて木箱などに入れる。

表. 能登島における塩土、塩釜、塩浜数一覧（万延元年・1860年）

村	塩土（人）	塩釜（枚）	塩浜（歩）	
西島（西部）	通	12	4	806
	田尻	15	4	1,861.8
	久木	12	4	1,260
中之島（中部）	佐波	7	3	1,090
	須曾	19	8	2,180
	半浦	20	7	3,350
	閨	25	8	2,232
	無関	15	3	1,080
	南	11	3	820
	曲	37	10	3,590
	合計	345	105	40,013.8
東島（東部）	向田	47	15	5,996
	祖母ヶ浦	15	6	2,880
	八ヶ崎	16	5	2,560
	鰻目	26	7	2,778
	長崎	9	2	965
	小浦	10	2	1,082
	野崎	31	9	3,623
	日の出ヶ島	7	2	750
	二穴	11	3	1,110

※「能登島町史 通史編（1985）」413項表4-56より抜粋

表. 塩田整理直前の能登島の製塩状況

地区	製塩場数	製造人員（人）	従業人員（人）	製塩地反別（町）	塩生産高（斤）
東島	6	38	167	1,491.7	39,673
中之島	3	21	93	482.3	3,285
西島	1	4	15	192.3	1,293

※「能登島町史 通史編（1985）」424項表4-61による。

6) 木箱に入れた砂の上に海水を注いで、砂に付着した塩の結晶を溶かし、塩分の濃い海水（鹹水）を集める。

7) 鹹水を釜に入れて煮る。塩ができるまでおよそ12時間かかった。

12時間も釜の火を焚き続けなければならぬため、大量の薪が必要とされた。製塩がおこなわれていた時代は、その近隣の山は燃料を確保するために重要であったことが伺える。薪が足りずに島の外から仕入れる村もあったようである。

#### 1-4. 能登島における水田の拡大

能登島にみられる水田は、江戸時代に開墾・造成されたものが多い。能登島町史によると、能登島の耕作地に占める水田の割合は、正保3年（1646年）で島全体で35.9%、長崎では39%であったが、万延元年（1860年）には、島全体で84.6%、長崎地区では95%となっている。およそ200年の間に各村で畑から水田への耕地の大きな変化が起こったことがわかる。低地の少ない能登島のため、新田開発には山腹の造成や谷地の開拓のほか、四方が海に囲われたことを利用して、海面を埋め立てて水田にした。こうした新田開発は石垣を積んだことから石垣田と呼ばれ、藩政末期から大正期にかけて盛んにおこなわれた。この頃、こうした開田が盛んだったのは、七尾南湾、西湾、北湾に面した場所であり、島の東側の鰻目や野崎において大規模な

干拓がおこなわれたのは、戦後になってからである。長崎地区においては、1947年の空中写真からは、長崎川河口部で現在の堤防の位置と重なるように海との仕切りがみえることから、早くからまとまった干拓がおこなわれていたものと思われる。

能登島には大きな河川がないことから、作物を作るにしても水の確保が困難であったと考えられる。島にはいくつものため池が見られるが、古い時代に用水を貯めるために作られ、大事に活用されてきたものと思われる。

現在長崎地区には3つの大きなため池がみられるが、藩政時代の堤に関する記録に残されており、その時代にはすでに存在したことがわかる。

### 1-5. 加賀藩における山林規制

山林は加賀藩のもとにその伐採が制限されていた時代があった。「松、栗、杉、楓、檜、桐、梅」の7種類の樹木の伐採を禁止する七木の制と、御林山といわれる藩有林が設定されていた。長崎村には以下の場所での伐採が制限されていた。1801年に七木の制、御林山の政策が緩和されたが、御林山は鎌留御林山として一つの村に一ヶ所だけが設定され、それとは別に貯用林も一ヶ所に一ヶ所に指定される。明治3年には廃止となった。

表. 寛政4（1792）年の御林山頭木字町間百姓稼山ヶ所取附帳による長崎村の記載

一、水ヶ平山	松雑木交御林	長式百六拾間巾百四拾間
一、壺ヶ所	風防波除元禄七年植松	
一、壺ヶ所	百姓稼山	

※「能登島町史 資料編第二巻（1983）」249項より作成。

表. 長崎村近隣の御林山、貯用林

村名	御林山	貯用林
八ヶ崎	大畠	池田
鰻目	五月田	天王山
長崎	水ヶ平	水が平
小浦	北谷内	垣内山
野崎	牧	小椿山

※「能登島町史 通史編（1985）」376項表4-47より抜粋。

### 1-6. 産業

能登島では明治、大正、昭和と、大麦、大豆、小豆、粟、蕎麦、小麦、稗、甘藷、馬鈴薯、大根などがつくられていた。その多くは自給用であったと思われる。養蚕は大正から昭和前期におこなわれ、全盛期には全農家の約半分が養蚕に携わったという。

果樹では、ウメ、ナシ、柿、栗、桃などが生産されている。柿は宅地や農道沿いに点在し、長崎のように漁がおこなわれてきた地域では、漁網の腐触防止に渋用柿が使われた。

能登島では、昭和40年代前半まで藁工品が多く作られていた。漁業に使う縄や網類にする重要なものではあったが、麻袋や紙袋、化学繊維の導入により、手間の掛かる藁工品はつくられな

くなった。

養鶏は、昭和 40 年頃までは多くの農家で少数の鶏が飼育されていた。

林業は能登島ではあまり盛んに行われていない。大正 9 年の記録では、能登島東部は用材の生産が多かったことと、松茸の産額が他に比べて高いことがわかる。

能登島大橋ができたのをきっかけに、白瓜の生産、「八太郎漬」など白瓜の漬け物が商品化され、能登島の名産品となっている。そのほか、ワラビとナス、キュウリ、ミョウガなどを漬けた「さわらび漬」や、くきわかめと大根、きのこ類を漬けた「長者どん」などがある。

表. 大正 9 年の林産表

項目		東島村	中乃島村	西島村
林産額	用材	1,900 円	—	—
	薪炭材	1,980 円	3,000 円	616 円
	竹材	112 円	—	100 円
	林産雑類	5922 円	54,606 円	2,704 円
	木炭	—	175 円	—
	合計	9,914 円	57,781 円	3,420 円
新林植面積	スギ	0.3 町	0.3 町	0.3 町
	ヒノキ	0.1 町	0.1 町	—
	マツ	0.6 町	0.3 町	3.0 町
林産雑類内訳	丸太	4,600 円	52,000 円	—
	板	810 円	—	—
	竹材	—	1,500 円	140 円
	栗	—	250 円	75 円
	まつたけ	300 円	156 円	60 円
	雑茸	52 円	—	—

※「能登島町史 資料編第二巻 (1983)」590 項表 (2) より。

表. 能登島東部の昭和 27 年の林産物

区域	造林面積 (ha)		伐採面積 (ha)	用材 (石)	薪材 (貫)	製炭材 (貫)	竹材 (貫)	木炭 (俵)
	人工	自然						
東島村	15.1	9.8	11.9	7,831	25,000	—	896	—
中之島村	14.6	14.0	15.0	5,500	27,700	2,500	4,500	375
西島村	16.0	2.0	12.5	5,150	20,000	—	—	—

※「能登島町史 資料編第二巻 (1983)」591 項表 (4) より抜粋。

長崎でおこなわる漁は、基本的に定置網漁である。長崎では古くから隣村の鰻目の領海により、漁業における立場は弱かったようである。大正 4 年に農商務大臣より、入漁登録証が出され、磯刺網漁業、小鰹刺網漁業、海鼠漁業、鮑漁業、石花菜漁業など、8 つの漁業について登録されている。

表. 昭和 27 年の能登島長崎地区の漁業と漁獲量 (自 1 月～至 12 月)

漁法	漁獲量 (貫)
その他の台網落網	194
底瓢網	122
その他の定置網	417

※「能登島町史 資料編第二巻 (1983)」644 項表 (18) より抜粋。

## 2. 現在の長崎地区

### 2-1. 集落人口・世帯

能登島の人口は、全体的に減少している。昭和30年と現在を比べると、東部、中部、西部地区とも人口が半減した。昭和57年から現在までには、全体的に人口は減っているが、どの地区においても世帯数は増加している。長崎地区でもその傾向は同じで、昭和30年代と世帯数はほとんど変化していないが、人口は約半分に減少している。

長崎地区の現在の世帯数は26、90名あまりの小さな集落である。昔は、半農半漁が生活の基盤となっていたが、近年は他産業、他地域へ



長崎集落



花まつも



民宿の舟盛り

の就業の場が多くなり、過疎、高齢化、少子化で集落の維持管理が危惧されている。農用地は水田21ha、畑7ha、すべて兼業農家で専業漁業者3名、他民宿2件、建築業1件、木工漆業1名となっている。

### 2-2. 産業

海草の花まつも（アカモク）は能登島の名産として人気がある。アカモクは、褐藻植物のヒバマタ目ホンダワラ科に属する海藻であり、冬から春にかけておもに能登島東部の外海で獲れる。

農業団体としては長崎生産組合があり、漁業団体としては長崎漁業実行組合がある。タコ壺漁、定置網漁がおこなわれており、近隣へ出荷されているほか、民宿では宿泊客向けに舟盛り等として提供されている。

長崎地区には2つの民宿がある。民宿浜弥は昭和56年、民宿吉兵衛は昭和57年に開業した。

### 2-3. 神社・文化財・行事

長崎地区には、春日神社があり、祭神は天児屋根命である。

長崎の造形文化資料として、春日大明神之神祠造建棟札（延享2年9月13日）、春日大明神御正体遷宮札（延享3年2月30日）、春日社拝殿造立棟札（嘉永2年9月26日）、春日社鳥居造立棟札（慶応3年9月吉日）

現在、能登島では「向田の火祭り」が日本三大火祭りの一つとして有名で、毎年7月におこなわれる。

春祭り：2月～4月、村によって祭日が異なる。アメカイ祭りといったところが多い。



タコ壺漁師



長崎神社

る杵旗が電線に触れるためであったという。現在は獅子舞が中心である。

### 引用文献（第2章）

- ・能登島町史専門委員会（編）. 1982. 能登島町史資料編第一巻. 能登島町役場
- ・能登島町史専門委員会（編）. 1983. 能登島町史資料編第二巻. 能登島町役場
- ・能登島町史専門委員会（編）. 1985. 能登島町史通史編. 能登島町役場
- ・七尾市. 2002. 七尾市ホームページ. 七尾市の人口のうごき. 行政区別世帯数および人口集計表（住民基本台帳登録人口）.

虫送り：6月27日、長崎では戦前まで、昼に太鼓をたたき回りながら札を立てたりした。

火祭り：7月31日、藩政期から明治にかけての記録では夏越祭りとあり、旧暦6月30日におこなわれていた。新たな半期を迎えるにあたっての祭りである。

秋祭り：9月～10月、昭和2年に電線がつくまでは、杵旗祭りが能登島にはあった。能登島西部で主におこなわれていたようである。杵旗が取りやめられたのは、大きなもので14mあ



秋祭り